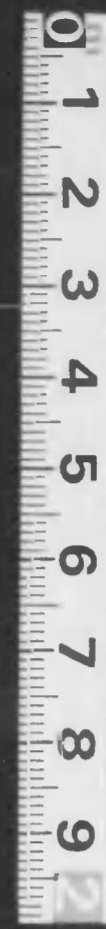


寫眞週報

情報局編輯  
九月九日 第二十七號



身を地雷となし  
身を橋桁となし  
身を舟艇となし

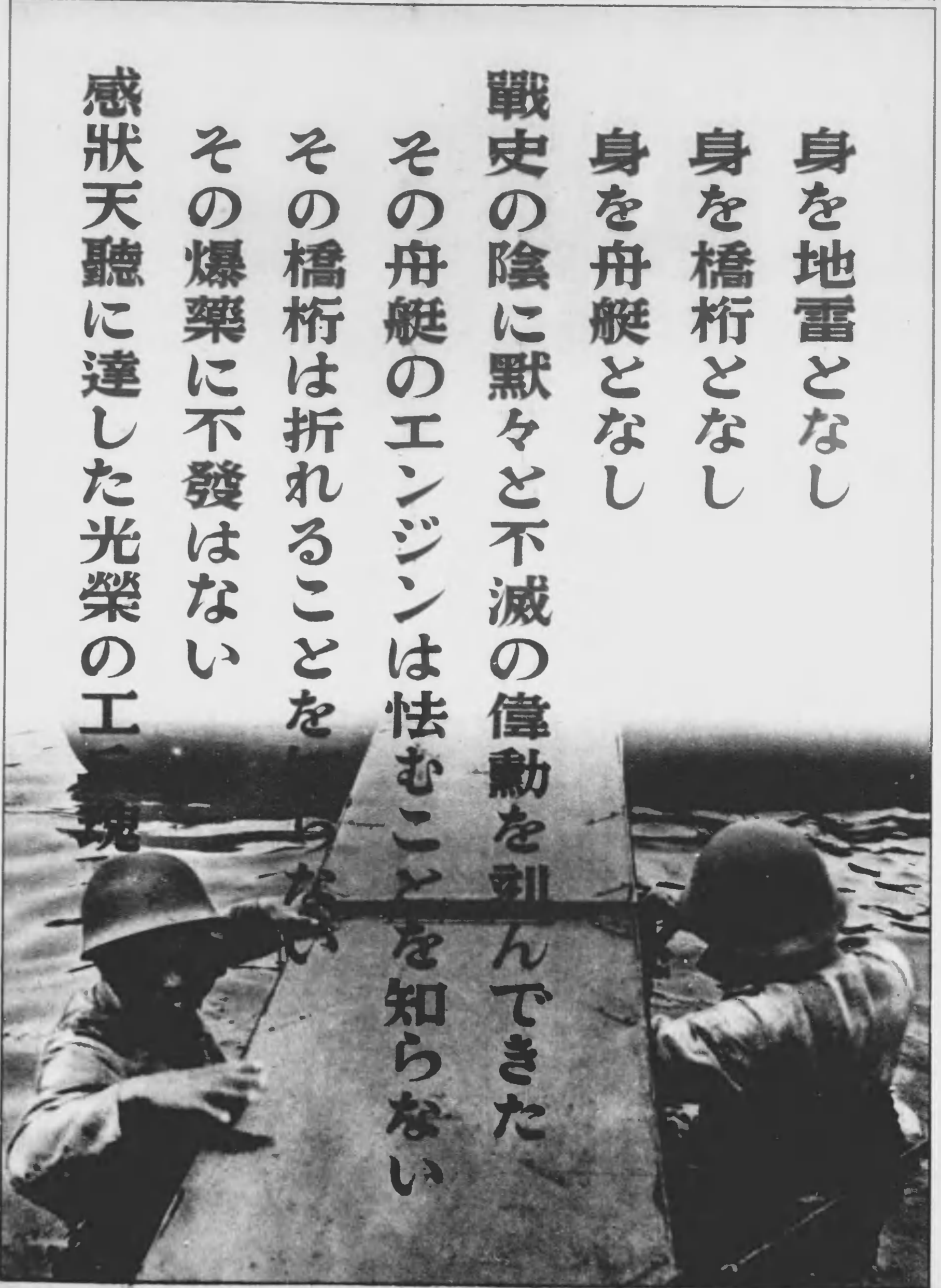
戦史の陰に黙々と不滅の偉勳を刻んできた

その舟艇のエンジンは怯むことを知らない

その橋桁は折れることを知らない

その爆薬に不発はない

感状天聴に達した光榮の工兵魂



# 工兵魂 上間に達す

大東亞戦争におけるわが工兵部隊の殊勳が、長くも上間に達せられました。友軍進軍の偉い人柱と散つたわが工兵隊員の隠れた勳こそ一億國民の誇りとして銘記すべきところではあります。工兵は他兵に協力して隠れた努力と成果とに満足して笑つて任務に就けるのです。工兵の魂として個人感状の榮に輝いた福井准尉や山本兵長のやうに、ジ・ホール水道の渡河に當つて、死んでも軸綱を離さず、脚腰が露出してなほ屈せず、舟艇のハンドルを握つて友軍を上陸させた壯烈魂を哭かすむる行為は、身を殺して他を助ける烈々たる工兵魂を遺憾なく發揮

したものでした。この世界に冠絶する工兵魂は何處で生れるのでせう。こゝ千葉縣松戸の陸軍工兵學校を見學しませう。嶮山を登攀し、大河に橋を架け、荒海を突破し、ジャンダルを切り拓き、濕地を渡り、鐵條網を破壊し、地雷を除き、戦車道を壊し、トーチカを奪取する等々、天然、人為の障礙一切を取り除く猛訓練の中にこそ、死に徹する工兵魂が培はれてゆくのです。身を支へる一物もない絶壁に特種な放射物が發射されて二筋の綱が下る。この綱を頼りに兵隊が登り、折疊式鐵梯子がかゝつた。かくて兵隊、兵隊が次々と崖を越える





る勢に早達心快は兵歩につ波を橋は軽かは軍が兵工



合め給を業作構築な橋渡大は隊一の舟でかけつは流津に骨と胸



るれさ轉運てつよにエンジンモは橋門のこ 橋門たて立組てつよに舟疊折の度三



たれば運が車砲てつよにれとはに河波道水ルーホ ジ きて立組を橋門



すは現を姿と々次に前敵くも昔は隊舟疊浮帯携 てけ抜き突を幕煙

す速に聞上



魂兵工

る作を地陣撃攻で死決は兵工 中の飛雷弾敵いた掛け上を身もどへいと分一



む邊は隊察偵で舟疊浮帯携とハハは形地の岸野 は淡水 は速流



るけ跡は肉の腫れ敵は肉の目一わくでん兵歩よ兵歩 るけ跡は肉の腫れ敵は肉の目一わくでん兵歩よ兵歩



るかばを破実行強の網線鉄け兵工がわ み包を身で幕煙



る作を地陣撃攻け兵工とッしよ いなが熱陣撃攻で野平の面ハ地陣



# 台湾が比島へ 軍役奉仕隊

さきに臺灣に志願兵制が公布されるや、その志願者數四十數方を突破する好成績で臺灣青年の熾烈なる愛國心の露顯として各方面の注目を買ふたが、軍役奉仕の方面でも支那事變以來、戰爭遂行の側面部隊としての協力を振りにほまことに涙ぐましいものがあった。

こゝマラの建設方面においても臺灣同胞の勞務奉公隊が各班數百名づつに分れ、いろ／＼な方面に出動、倉庫の建設、排水溝の構築、重要物資の移動等、炎熱下にたくましく臺灣青年の意氣を示して元氣一杯立働いてゐる。

在マラ、久宗・深尾兩特選員  
 絶つてく美熟なものも  
 必ず、頼むしい奮闘が  
 。



五體に漲る若い力が、凡ゆる困難を吹飛ばして新しい建設に邁進する。さあ、頑張るゾ。



⇒ 現地人を管轄して自動車修理隊大命の活躍

⇒ 一日の勞役が済むと明日に備へて作業状況の打合せ



# 日本語講習會は超満員 マニラ

マニラの鐵道省觀光局事務所に開かれてゐる日本語講習會では毎日二百五十人からの市民が初等、中等高等の各科に分れて、日本語の勉強に熱中してゐます。「比島の將來はまづ日本語を講ずることから」といふ九等車は新比島建設に挺身する現地日本軍や在留日本人を見るにつけ、知るにつけ、日とともに高まつて、どこの講習會も超満員、講習生も各自職場の必要にせまられての講習だけに、その上達ぶりも驚くほどです。

ノウウエグ、ボラ、イワ、コノクラ、イカケル  
 2 アイウエオ、カキクケコ、サシセソ、たいいば上手になりまし  
 3 いいですか、わたくしの「ワ」ハイ、ハイ、ハイ、ハイ  
 在マニラ  
 久米・深尾兩特派員



# 滿洲國建國十周年紀念

進歩のまじし覺目

## 建國十周年慶祝歌

明四・中編 第三

1 ハ ッ カ イ ト ア マ テ ラ ス  
 一 ハ 故 キ 奉 勅 天

ヒ カ リ ア マ ネ ク カ カ マ キ テ  
 巾 袂 慈 龍 民 民 蟻

マ ト ク ノ モ ト ク ミ ム ヲ ア  
 た 暁 思 も 故 故 四 長

ワ タ ハ タ ク ハ コ ノ イ ゲ ミ ケ ン 哉  
 古 傳 同 頌 王道 平 龍

コ 滿 ク 州 建 コ 國 於  
 十 年

建國以來、躍進に躍進を重ね、目ざましい發展をとけてきた開拓滿洲國では早くも建國十周年のよき年を迎へ、来る九月十五日、國都新京で滿洲國建國十周年慶祝式典が盛大に催されることになりました。あたかも十年

この間、治安に、軍備に、産業に、經濟に、國民生活に、目ざましい發展光實をとげ、近代國家としての威容を整へ、大東亞共榮圈確立の重要な一環としてこの地位はいよいよ重要な加へてきたのです。いま建國以前、舊東北軍閥の専横によつて、三千万民衆が塗炭の苦しみに呻吟してゐた當時と、三千万國民が帝徳を仰ぎその生に安んじ王道樂土を謳歌する今日とを比

前のこの日は、わが國がその獨立を承認し兩國が永久に結ばれた日であつて、以來十年間、親ととなり兄となつて育成發展に努めてきたわれらも、ともに聲を合せて心から盟邦第十回の誕生日を祝願しようではありませんか

較するなり、その躍進の跡はまさに驚歎すべきものがあります。以下その姿を最も具體的に物語る種々の數字によつて國勢躍進の跡をたどつてみませう。

まづ、豫算が建國前後の一億一千万圓から約二十三億の二十五億圓、租稅收入の九千九百万圓が約四億の三億七千万圓、關稅收入五千二百萬圓は約三億以上の一億七千二百萬圓になつてゐます。

これらの數字をみてもどんなに發達とした發展を續けてゐるか想像されるではありませんか

建國十周年紀念  
 萬世之基  
 張景惠

世界史上に輝く  
 晴れの調印式を舉行  
 基本事項を公表

十年間の歴史的事實を物語る昭和七年九月十五日の新聞紙



↑ 皇族の意気高らかに  
建國大學生の行進

← さしもの大団員をきつしりと  
めて並進と委員代表がつめかす

## 慶祝動員大會

一國の意氣と國運の隆盛は直ちに國民の氣運に反映される。王道の下、安居樂業、ひたすら新興滿洲國の意氣に燃える三千五百萬國民の氣負ひ立つた姿こそは、まさに建國十年洋々の前途を約束される國運の隆盛を映し、日に月に躍進を続ける正しい姿であらう。建國十周年を迎へて、この意氣を示す興安國民動員全國大會は、全國代表六方を集め、國都新京に盛大に催された。五族族の體へる下、祖國の前にわれわれの心意氣を示し、分列行進に、露營訓練に、防空訓練等各種行事に豪壯な陣容が力強くくりひろげられた

撮影 滿洲國通信社



↑ 建國大動員大會の二つ、防空訓練に、日頭  
の輝く中をみせる露營の消し



⇒ 新東京の一角に立つ建國の意氣を  
映し出す露營の消し

← 燃ゆる露營の消しを白衣についで  
白衣隊が隊を





「東新都園」年十りよてれらせと地の城王 だ園轄の設建園洲滿そこれこ 都園のロキ方平百二たれさ設建に中只眞の原平るた漢茫  
 所場七同の幹較道(下)と場廣同大たれさ成完(上)るみてせか響を動鼓の力固るた々陸てしと心中の化文業産濟經治政 万百口人まいは

所内案情事新滿 影悉

## 京新の今と京新の前年十

心謝五年国十國建國州滿





# マレーの俘虜 三

陸軍一等兵 竹森 一男 作

その夜、消燈喇叭が鳴って間もなくのことであつた

隊長室に呼ばれた大泉軍曹は、市西北方二十キロの密林中に敵兵潜伏の模様あり、直ちに一分隊を率ゐて出動するやう命じられた

枕を並べて寝てゐた兵隊はがばと飛び起きた。自動貨車が用意された。道路上でエンジンの音も〇〇しく夜の静寂を破つた

溝口は軍装をして銃を執り、石の階段を下りて砂利を敷いた倉前に出た。美しい月夜であつた。既に葉を閉ちて睡つてゐる合歡木や爽やかな微風に揺れてゐる悠大な椰子が月光を浴びてゐた。赤と黄色のカメナの花が白い道路を挟んで車を車影の中に輝き上つてゐた

銃に弾丸を装填し、剣を付したとき、一同の覺悟は、その表情に現はれて、青白い彫刻的な顔の輪郭が凛として雄々しく月の光の中に映し出された。一同は四方八方から自動貨車に駆け上つた。戦友は戦友の銃を取り、その手を握つて引き揚げた。そこに、性格の違ふ人々の心理的な争ひなぞは儼然も存在しなかつた

「は原住民さ」と捕本が得々として云つた  
「よくですね。椰子屋の小さい家にはいつてジャンクルを押し込められてゐるのには、みんなマレー人ですものね」と溝口が口を入れた

「東洋人のんびりしてゐる善良すぎたから、すつかり滅されてしまつたんだ。何んでも現在は、白人一人についで、東洋人數十人の奴隷を生れながら持つてゐると同じことになるんだつてね。けしからんと」

「しかし、もう、本を本ですよ。もう……」と溝口は云つた  
「行けども行けどもゴム林、だまると本林がふやうに云つた  
「稲光り、一閃見え、ゴム涼し……」と雷山が云つた

はるか西の空にバツと響き渡るやうな雷光が走つた  
「けふは積極的に活動するぞ」とその言葉口は強く思つた

目的地の部落に到着した。自動貨車は、月光を浴びて清冽な流れを湛へてゐる河を背に建つてゐる灰色の警備用所の前で停つた。一同は軍備手の矢口上等兵を殺して車を捨てた。そして派出所の扉を敲いた  
淡緑色の無縁帽をかぶつた、折檻の黄色いワイシャツに水玉模様白い腰巻をまとつた若いマレー人這者が扉を開けた  
「サキ、ジャム、ナンティ(一寸待つて下さい)」

彼は大泉軍曹をうやうやしく室内に招き入れると、椅子を進め、慌てゝ裏口から出ていつた  
一同は派出所前に立つて、改めて周囲の密林を視察した。――對岸には椰子樹に隠れた民家が点在し、その後には密林地帯

「みんな乗つたか」  
大泉軍曹が下から呟つた

「番號」  
「一、二、三、四」  
番號が軽く流れた

「よし」と大泉軍曹は助手兼の扉に手をかけた  
自動貨車は進み始めた。一直線に通ずるマレーの舗装道路は白く滑らかに光つて、涼風が汗ばんだ頬に快く當つた。自由が分職員の心に訪れた。自ら逞しい血が燃え上つた。微笑が流れ、快活な話題がひらひらと

溝口も取り残されたやうな気分もこの澄はつた気持から解放されて、時々その話題の中に混つた。溝口と打ちとけて話す機会を持たなかつた戦友は、遠慮深い應答をして、今まで底意のなかつたことを示さうとした。勿論溝口は習慣上、對話から獨り脱れさうになつたが、昨日までのやうな車屈さには陥らなかつた

彼等と一つになりえなかつたのは、必要以上のインテリらしい自負と羞恥が變に混濁してゐたからに違ひなかつた。それは、觀念的で、實行を怠つてゐた生活習慣が

が黒々と丘をなして連つてゐた。月は中天に昇つて、正面から河面を照らし、小波は銀鱗を漂はし、岸には盛夏のサンパンが深い影の中を以てゐた

まもなく最初の遺棄が溝口から廻つて来た。その後には派出所長のマークを左腕に巻いたテラブリした

ピロッドのトビイをかぶり、茶褐色の制服に牛ツボンを着いてゐた。彼は兵隊達に撃手の敬語をすると、緊張した顔付のまま、足早に石の階段を駆け登つた

彼はかどみこむやうにして大泉軍曹の前に立つた。溝口、池原、捕本の三名は鞭首を響かせて中にはいり、銃剣を拵つたまゝ、いかめしく分隊長の後に並んだ

「山守隊の方へお入りなすか」  
この派出所で、白人の兵隊はどこにゐますか

大泉軍曹は單語を考へ、英語とマレー語をまんぼんに使ひながら訊ねた  
「はい、十二月、十二、三日頃まで英軍の一箇中隊は、この對岸の密林中に逃げ込んでゐました」と所長は熱心に云つた  
「うん、うん」と溝口は背いて前面に出



作し出した病態であつたのかも知れない。溝口はこの二、三日來の、解決を迫る心から、漸く今日に至つて曙光を見出したことと納得することが出来た。日本が指導者となつて東亞諸民族の間に復活の狼煙が上つたとき、どうして自分の中に新生の芽が萌え出ぬわけがあらう、話が合はなくてもいい。常に仲間はずれになつてもいい。自分にはほゞまみ、水い間の卑屈な性格を克服し、たゞ無言の事實で、戦友のために盡してみよう。無條件で、全體のために、誰の眼にもつかぬ公益に、最大の努力を拂はう。まづ戦友を積極的に愛する細かい心遣ひから始めてみよう――この新しい思想が溝口を活気づけた

白い建物の並んだ美しい街は、白いチャナールの花や赤いポコの花に刺された廣大な庭園の中に建築された、ドームの屋根の華麗なクリーム色のイスラム寺院を通過すると間もなく終つた。ケダ州の王宮やサルタン一襲の瀟灑な邸宅を過ぎると、椰子林のある丘に出た。爆破された鉄橋や、ほの暗い沼のほとりを通つて、自動車は爽快に走つた。洗はれたやうな清浄な空は月を一層美化するためのやうに淡い白雲を散らしてゐた。マレー半島は漸く深い睡りにおち、その静謐さは、きれいな空気を一層ひきしめた。野生の花や果實の匂ひがどこからともなく漂つてきた。さまざまの昆虫類の奏樂が葉や樹々の影をたると静かさの中から起つた

爆破された橋梁には第一線の工兵が修理しつゝ、前進した跡がまよ／＼と見えた。簡單な板片や丸太で繋ぎされた橋を通る度に、自動貨車は速力をゆるめ、巨大な砲艦をゆすり、今にも沼や川に顔落しやうに身を吹きながら進み、再び全速力でまよ／＼と

た。そしてその意味を大泉軍曹に傳へた。所長は英語の分る溝口に活気づいて、眼を吊りあげ、背を固め、皮ひきはさま／＼の大膽な身振りを示しながら語つた  
「日本軍は此處で敵軍と戦ひ、ことごとく撃滅したのですが、その時の敵軍兵が若干

らに月光の流れた白い舗道を疾駆してゆくのであつた  
この一本の舗装道路はマレー半島を縦断し、ジャングル、山脈、河川をきりひらいて敷設した英國の誇りであつたが、この完璧な道路こそは、皮肉にも英軍の逃走を容易にすると同時に、日本軍の電撃的進軍も可能にしたのであつた。曲り角には必ず自動車指標が間に浮き出るやうに白く點々貨物自動車、小型戦車等が無數に顔落してゐた

椰子やバナナや檳榔樹やマングステンの如や、深い密林を何度も通ると、やがて何里にもまたがるゴム林が連つた。秩序整然たるゴムの林立は月光の中に見ると爽やかであつた。舗道の上を兩側から蔽ひかゝるゴムの葉の天蓋はまるで白雲のやうな印象を與へた。自動車のライトの前に數限りない昆虫が飛びかゝり散つていつた

「全線このゴムなんだから、構へね。英領にはいるそや、満目一新するんだから構へねよ」と捕本が云つた  
「今度、日本が經營するんだが、そつくり貫つて氣の毒みたいだね」と大林が云つた

「こんなには深山裏らんさうだよ」と池原が云つた  
「とにかく、これからの全般的な經營が、なか／＼難しいでせうね」と溝口は謙遜して口をいれた

「建設が大へんなのさ。今までの經濟機構だつて全く變へねばならんよ。中間採取の華僑が實はマレー經濟を動かしてゐたやうなものだからね。プロカーの華僑がしたまは儲ける。それを支配する英國が外國貿易で腹をこきしてゆく。莫逆を見てゐる日の拂曉でした。二人の白人の兵隊が、急ぎやつて來たのです。この對岸の密林に潜伏してゐるのではないかと思はれます。私の手帳には、たぶん部隊を失つた僅かな兵隊が、何とか隠れてゐたが、食糧に窮した擧句、のそ／＼出てきたのではないかと思はれるのです」

「捕本が、その密林に出るまで、案内して貰へまいか、ひとつも入て来る」と大泉軍曹は云つた  
所長は背いて、巡視を促した。一同はぞろ／＼と外に出た。溝口は所長の傍に付き添つた  
「アバ、ナム、アンカウ(貴方の名前は何か)といひますか」と溝口は會話を練習するつもりで話しかけた  
「サヤ、ナム(私の名前は)アブドラ、モハマ・ハシム」と所長は快活に答へた  
「マンビントエ」と巡視が自分の胸を指しながら、溝口に自己紹介した。何とはなしに三人はなごやかに笑つた  
河ぶちに出た。マンビントエはまやひしてある渡船の上に乗移つた。そして橋をとつて一同に合圖をした

一同はそこに立つてゐる數分間の裡に、生ま／＼しい日英激戦の跡をつぶまに見てとつた。破壊された敵戦車が河中に姿を半身没してゐた。自動車が顛覆した。傳つてゐた。草叢の中には瓦斯マスクや軍靴等が英軍兵士の身に付けてゐた装具(その中には首に吊る藥入れの袋や軍用手帳や書籍等があつた)に雜つて、無残に轉つてゐた。録音がそれらの品物を拾ひあげて點検すると、首が懐中電燈を向けた。外形は愉快よく作られてあつたが、どれ一つとして日本製の装備に似てゐるものはない



# に元胸の一本日を章能技れ晴天



「大東亞がこんな装束だったのか」と二回は奇しがる。然して顔を見合はせ、囁いた。溝口は美軍の装束によつて今更ながら自分の身につけてゐるものの格好さが分つた。彼はそれよりも、一兵隊の身につけてゐる軍服手帳や住所録や書籍などに、インテリらしい注意を拂つてゐた。何もかも捨て、逃げたか、或ひは此處で死を覚悟した兵隊の書物の姿を思ひ描かずにはゐられなかつた。彼は、敵ではあるが死せる無名戦士に對する尊敬を心の中で繰返した。しかし河に架けられた鐵橋が、丁度真中頃から敵軍によつて爆破されてゐるのを見たと、今度は全く違つた憤激の情がめらめらと湧き上つた。

一同は二列縦隊になつて二艘のサンパンに分乗した。船は揺れ、水がびちや／＼鳴つた。マンビンタエは船に立つて岸を突き進めた。船はゆるやかに水上に漂ひ、對岸に向つてうねりながら前進した。月の光は二列に向ひ合つて並んでゐる兵隊の姿をくつきりと小波の上に浮べた。兵隊は奇妙な沈黙の中に自分達の姿を振り返つた。魚の姿態を模し、尖つた鼻に魚の頭を描き、船尾を尾に形造つた緑色のサンパンは、鈍い水音を立て、不思議に速く、對岸に到着した。溝口は第一番に岩に飛び移つて、大泉軍曹の銃を受取つた。船の尖頭に書かれた魚の眼が奇妙に光つてゐた。銃を片手に握り、椰子の木立を縫つて前進した。やがて月にぬれた白い小路に出た。そこからはゴム橋に横たひたジャングル地帯で、最早や月の光も届かぬ黒々と相対した樹木が鬱々と生ひ茂つてゐるところであつた。

「このゴム橋がやらしいのです。まさか夜密林の中にあるとは思はれないので、きつと此處にひそんでゐると思ふので、所長は深刻さうに眉をひそめ、大袈裟にゴム林を指しながら云つた。

「あゝ、テレマカシ、テレマカシ、御苦勞でした。もう歸つても結構ですよ、ひつつかまへて派出所まで連れてゆきますから、ハ、ハ、ハ、」と大泉軍曹は豪快に笑つた。そしてサツと懐中電燈を照らしてゴム林を見た。

アブドラ所長は何か口の中でぶつ／＼と云つたが、兵隊が二列の隊形をとつたのを見ると、マンビンタエを促して

「サヤナンテイ ヤダ(待つてますよ)」と云つて踵を返した。マンビンタエは懐中から手帳を取り出して歩きながら眺めてゐたが、急に振り返つて、大聲で

「左様なら、今晚は……」と日本語で云つて手を振つた。兵隊は

「スマテンガイ！」と叫んで笑つた

「一、二、三、四番隊がかゝつた。溝口は分隊の後尾を前進した

一同は身をひそめるやうにして、ゴム林中にはいつていつた。大泉軍曹は先頭に立つて、大股でぐん／＼歩き、時々懐中電燈を照らして、地上や樹の葉をてらした。ゴムの匂ひがした。草葉には虫が鳴いてゐた。それが兵隊に踏みつけられさうになるまで、その音楽をやめなかつた。野猿の「ガア／＼」啼く聲が赤兒の泣き聲のやうに聞えて、ジャングルに迫つてゐることを告げた。

無気味さが兵隊に力と與へ、自ら歩行を速めた。九官鳥の啼き聲が遠くから聞えた。一匹の螢が光つて兵隊の足もとを流れるやうに飛んでいつた。その螢は群生して一本のゴムの樹に鈴なりにとまり、一樣に、美しい星色の光を發して、びか／＼と

「あゝ、テレマカシ、テレマカシ、御苦勞でした。もう歸つても結構ですよ、ひつつかまへて派出所まで連れてゆきますから、ハ、ハ、ハ、」と大泉軍曹は豪快に笑つた。そしてサツと懐中電燈を照らしてゴム林を見た。

アブドラ所長は何か口の中でぶつ／＼と云つたが、兵隊が二列の隊形をとつたのを見ると、マンビンタエを促して

「サヤナンテイ ヤダ(待つてますよ)」と云つて踵を返した。マンビンタエは懐中から手帳を取り出して歩きながら眺めてゐたが、急に振り返つて、大聲で

「左様なら、今晚は……」と日本語で云つて手を振つた。兵隊は

「スマテンガイ！」と叫んで笑つた

「一、二、三、四番隊がかゝつた。溝口は分隊の後尾を前進した

一同は身をひそめるやうにして、ゴム林中にはいつていつた。大泉軍曹は先頭に立つて、大股でぐん／＼歩き、時々懐中電燈を照らして、地上や樹の葉をてらした。ゴムの匂ひがした。草葉には虫が鳴いてゐた。それが兵隊に踏みつけられさうになるまで、その音楽をやめなかつた。野猿の「ガア／＼」啼く聲が赤兒の泣き聲のやうに聞えて、ジャングルに迫つてゐることを告げた。

無気味さが兵隊に力と與へ、自ら歩行を速めた。九官鳥の啼き聲が遠くから聞えた。一匹の螢が光つて兵隊の足もとを流れるやうに飛んでいつた。その螢は群生して一本のゴムの樹に鈴なりにとまり、一樣に、美しい星色の光を發して、びか／＼と

## 大東亞戦争日誌

一八月一

二十七日 ●ソロモン群島方面海軍は八月二十四日敵増援隊を同群島東方洋上に捕獲、直ちに航空部隊をもつて急襲し、これに大損害を與へ同方面より警備、本日までに判明せる新艦果

米空母新大型 一雙大破  
同 中型 一雙中破  
米駆逐艦ペンシルヴァニア型 一雙中破  
本艦隊におけるわが方の損害、小型空母一隻大破、驅逐艦一隻沈没

〔註〕本海戦を第二次ソロモン海戦と呼稱



農産工から探検犬、さてはタイプリスト、製靴工と、胸に自信の産製戦士九千名が参加して開かれた大日本産業報国会主催の第一回技能報国会大会は、豫想以上の優秀な成績を収めました。夕張の探検隊の如きは平常探検の四倍といふ驚異的な数字を記録し、またタイプ製靴では十分間のタイプ数四百九十五字といふ日本新記録が飛び出すなど、技術日本の威容を遺憾なく發揮しました。この大会で天晴れ日本一の榮譽にかゝやく大政翼賛會總裁賞の四十三名以下、大日本産業報国会会長賞、三等賞及び地域推薦入賞者合計三百四十一名に對する表彰式が八月二十七日東京丸内の大東亞會館で、東條大政翼賛會總裁、小泉厚生大臣、平生大日本産業報国会会長らが臨席して盛大に行はれました。

今回の受賞者はいづれもその技能はもちろん、作業態度においてもまた大日本産業人の模範となるべき人々で、これまでも産業報国会に大きな功績を建ててきました。これら職場の獎勵甲組はこの日の感激を熱腸の報とし、こんどいよいよ自分の技能を傾けつくして戦時増産を推し進めてゆくと思はれますが、かうした産業報国会の制度は必ずや日本の産業を大いに躍進させることと期待されます。

目を叩いてこんどともしつかり頼むと、

大日本産業報国会

日四十月三十月九一日念記謹保法司

犯した罪の償ひはすではな  
した。だが社会は必ずしも彼に  
對して寛大ではなかつた。しか  
も己れの心に燃付けられた罪惡  
感に對し心をいよ／＼と、重  
んん心を一層深んだものにして  
いつた。救はれない世界。彼の  
前に残されたものは暗い道しか  
なかつた。そして二度、三度  
と彼は罪を重ねてゆくより他な  
かつた。しかも心の底に残つて  
ある罪性の叫びに常に自己をさ  
いなみ、光明の世界への復讐を  
激しく求めながら

かうした彼等刑餘者を温かく  
抱き取り、平衡を失つた生き方  
と對し心を、救ごうの鞭をも  
つて鞭打ち、明るい世界への道  
へ導いてゆくのが司法保護團體  
の仕事であり、司法保護記念日  
の趣旨である。全国各地の保護  
團體に屬する彼等はいま、大東  
亞戦下、齊しく、陛下の赤子と  
といふ自覺に目醒め、夜々とし  
て更生の道にいそ／＼である。

茨城縣水戸市にある司法保護團  
體財団法人「共榮報恩會」  
この會員連も農道を通じて知  
つた正しい生き方に過去の影を  
洗ひ落して、ひたすら更生の道  
へ進んでゐる。何をやるにも先  
づ自ら陣頭に立つ指導員連の熱  
誠と製ごころに導かれたから。  
こゝに彼等會員たちの率直な感  
の聲を聞いてみよう

編輯 内田武臣



「お民おれ」この心に  
めざめた彼等はもはや立派  
な陛下の赤子として更生  
したの光、日々の精進ごと  
に清く心が洗はれてゆく

こゝには職員も更生した人達が當つてゐる。庶務も會計も  
建設も一切彼等の手によつて少しの間違ひもなくまきま  
ま進められる。これがこの會の、一つの特徴だ。建設費に  
も當つてゐる。會で自分も働いた世界でまればこそ會員  
達の心の精進にもよつてまきまま進められるのである。

「お民おれ」この心に  
めざめた彼等はもはや立派  
な陛下の赤子として更生  
したの光、日々の精進ごと  
に清く心が洗はれてゆく

こゝには職員も更生した人達が當つてゐる。庶務も會計も  
建設も一切彼等の手によつて少しの間違ひもなくまきま  
ま進められる。これがこの會の、一つの特徴だ。建設費に  
も當つてゐる。會で自分も働いた世界でまればこそ會員  
達の心の精進にもよつてまきまま進められるのである。

こゝには職員も更生した人達が當つてゐる。庶務も會計も  
建設も一切彼等の手によつて少しの間違ひもなくまきま  
ま進められる。これがこの會の、一つの特徴だ。建設費に  
も當つてゐる。會で自分も働いた世界でまればこそ會員  
達の心の精進にもよつてまきまま進められるのである。

感想の一端を記さして載せます  
この共榮報恩會に入會するまで数回暗黒の生  
年來國家の御厄介にはかりなつてをりました  
が、此處こそは皇恩の万分之一なりとも報せん

清を傾けてをりましたが、一團として保護の手  
を受けたことはなかつたのですが、こゝにきて  
初めて親心厚き御指導を受け、心身共に改造さ  
れたのであります

私は入會早々、この農場に參り、夜は鴉鳥、  
雀は雀の聲のほかに話しかけてくるものもなく  
唯自然の中に没入して黙々とけんてきました  
が、その間にも會長はじめ指導員の方の眞心が  
私の將來に光明を與へて下さつたのでした。載

水戸郊外に廣大な土地を新  
いで興を興し、種を播き、  
ひたすら自然に没入して生  
のよろこひにひたりつゝ、正  
しい生き方を身につける。  
こゝに明るい楽しい生活が  
あつたのだ。この「行」を  
通じて一切の過去の影がふ  
り落される。こゝでは農道  
をもつて輔導の中心とし農  
場の道場としてゐる

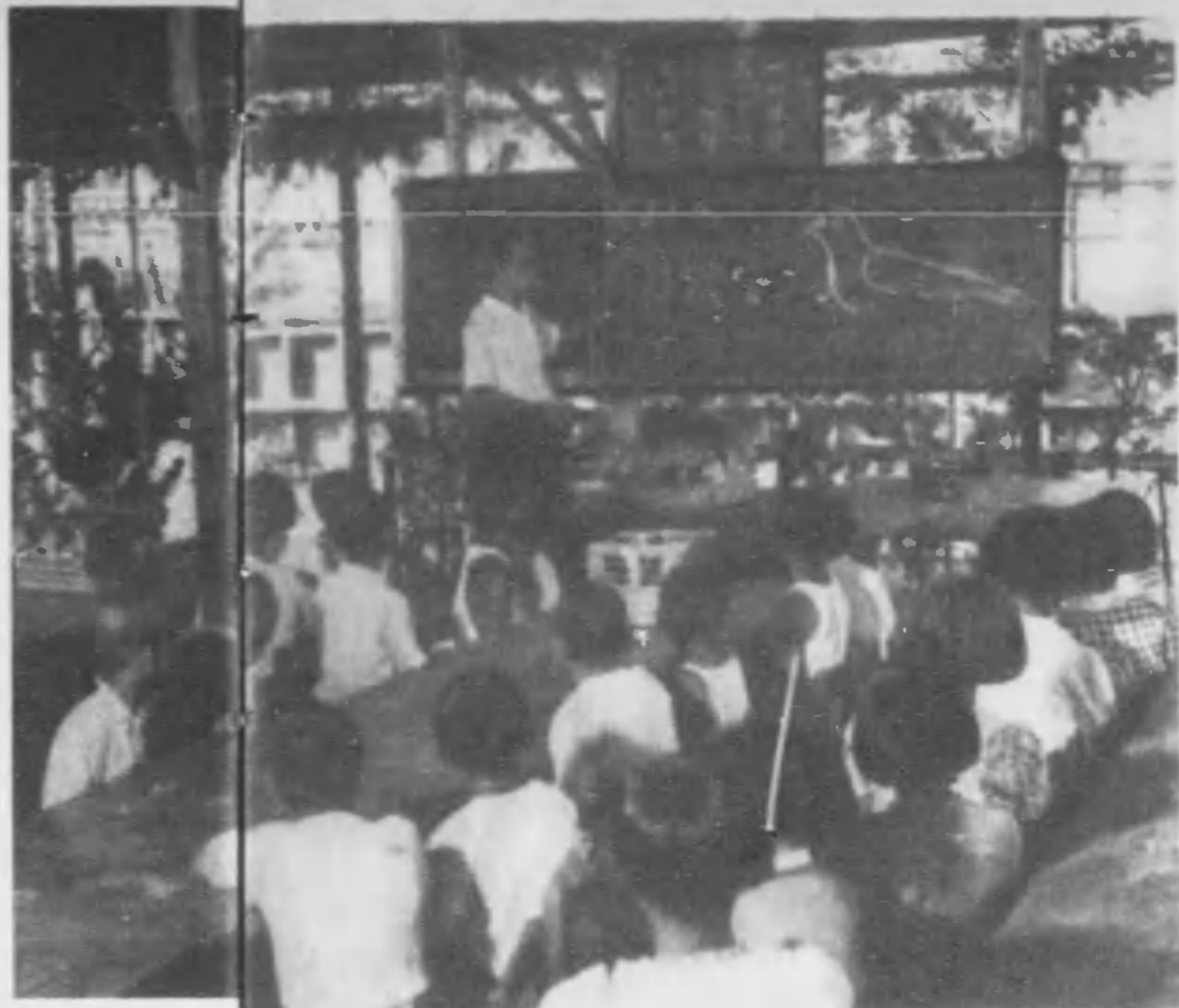
幼々の顔より大きな内風、  
丸々と彼等の心の角もとれ  
て明るい微笑がこぼれる。  
會員の中には若や子供たち  
と一團にこゝに住んでゐる  
人々もある

皇國の赤子として更生すべく當會に入會して  
規定の三ヶ月の練成期間も大過無く終了し得た  
のは、廣大無邊の皇恩に依るは素より會長以下  
諸職員の御指導と御配慮の結果で、爲す可きを  
爲したる後の悦びと心身に得たる成果は實に  
大きいものがあります

自己本位、利己主義的色彩濃厚な自己満足  
の生活に生きて来た私がペンを紙に代へる、その  
事が既に精神的にも、肉體的にも、生活の百八  
十度の轉回と云はねばならなかつたので、之が  
遂行に就いては會長も當初大いに危ぶまれ、私

自身でさへスポーツに傾けた身といへば  
的運動と農業とは大なる差異があり、鞭打  
ど間の體使に堪へ得るか何うかと、頗る心配し  
たのであります。が、さしたる支障も無く期間  
を終へ得たのは、精神力が體力を克服し得たの  
であると思ひます。そして得たものは、今まで  
の物質のみに求めた満足感を脱し、心の満足が  
眞の幸福なるを知つたことでした。これは何よ  
りの収穫で、たゞ今後はこの體得し得た精神力  
と體力を以て、鴻恩の万分之一に報い奉らんと  
とす。共榮報恩會石崎農場 8・眞生





「鳩の郵便屋さんはお手をかりいふように運びます」

# 六年生の鳩の班長

「タラ、タラ、タラ、タラ」と、ごらんごらん、こんなに喜んで……

大阪市青和国民学校

撮影 中藤 敦

これ、わたしたちの鳩です。可愛いです。



今日は楽しい通信訓練。鳩籠に入れて郊外へ、算術のときはえをお母さんに知らせませう

もの言はぬ可憐な空の報道戦士 といつたら、「あ、鳩舎のことだね」と諸君はすぐ納得するでせう。それは鳩舎の男らしいお手柄をたへた名譽あるまたの名前でした。

いま主として軍用に使われてゐる鳩舎は、野生の鳩から馴らしたもので、その鋭敏な本能を訓練して、極度に発達させたものであることは諸君も知つてゐるとほりです。

この鳩舎の飼育は方々の国民学校でももう以前からやつてゐて、動物愛護、観察教育の材料として使つてゐるほか、通信訓練を行つて軍事知識の普及をはかつてゐますが、大阪市住吉区祝全町の青和国民学校でも現在児童たちの手で四十羽を飼育してゐり、なかには七十キロの記録をもつてゐる部隊長格の鳩舎もゐます。ついでこの間もこれらのなかから優秀なものを選んで軍に献納したことがあります。

鳩舎は飼つてみればわかるやうにほんたうに利口な鳥ですから、その世話についても十分気をつけなければならぬので、この学校では世話役として鳩舎といふものを設け、鳩のお世話の上手な児童を多くに鳩舎長に任命してゐます。

今日はこの可憐な鳩部隊の男らしい活躍ぶりを見学することにいたしました。

一、二、三、手を握す



通信筒を足に巻きながら「立派な役目を果たして頂戴」

大東亞戰爭漫遊日誌  
川石 介進



小園米軍も奮然と



ラブリツに伊豫に伊布布



英のトイ兵団と奮然と



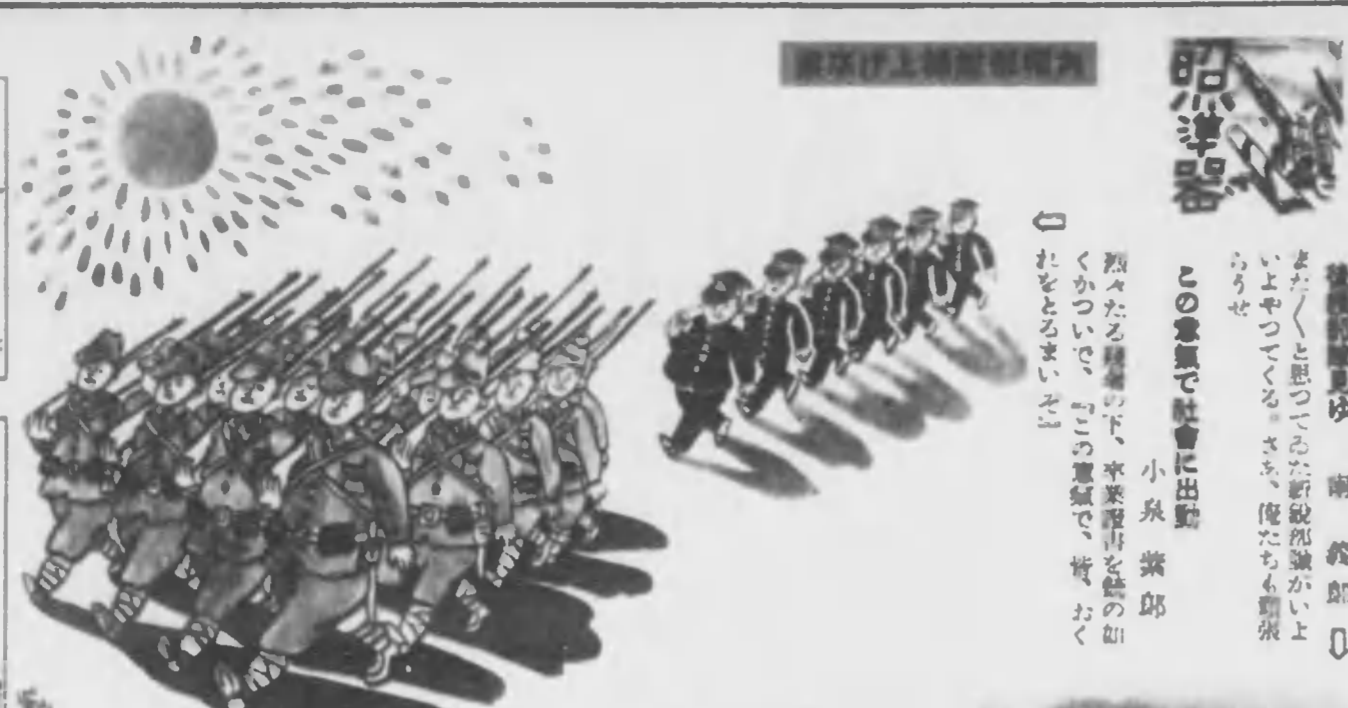
日本大のラトルと活會演



武動に輝くマルビク義勇隊



新大の型女日茶茶



この戦争で社会に出る  
小泉 業郎  
烈々たる精神の下、本業書を註の如くくわくわく「この戦争は、世におくたのめなことです」



角福出版社  
杉 征夫  
「本業は繰り返があつても、研究は繰り返あけぬつもりだから、この帽子で押し通すよ」



化学教室にあがる感涙の水壑  
森熊 猛  
科學日本、明日は我等の双肩にかつてゐる。断じて米英科學者等に追いつき、追いつかぬは、この「頭母」、試論信で、あける水壑



○ 法廷に闘争時勢  
東京市 築地本願寺  
宗門の時勢闘争を日さす東京市小石川陣軍工科學校跡の建設作業奉仕場、八月十四日、陣軍の生徒たちと新聞記者の男女共約百名の奉仕隊が参集、朝れぬ手に無ヤマコをとつて、東國への敬虔な感謝をこめた勤勞奉仕を行つた



レマ戦記  
映大



復習室  
本館からあなたは何を學んでせうか？  
1 工兵の主なる敵九つを挙げて下さい。(3頁)  
2 滿洲國は建國以來今年で何年になりますか。(1頁)  
3 ケーデー州はどこ州ですか。(1頁)  
4 「備前編」はその特有の強いや、ウホノクを調製して製造させたもので、すくなくとも漢字に直して下さい。(20頁)  
5 臺灣における第一回志願兵の志願者はどの位あつたか？(10頁)  
6 ジョーナル水道の河で、死んでも船を離さず、逆風に船を射抜かれ、敵兵、敵艦が露出してもなほ屈せず友軍を上映させた兵士、勇士は、(8頁)  
7 優秀な邦文タイピストになるには、何分間に何字タイプできるでせう？(20頁)  
8 備前編に比して、一掃せしめ、敵軍の敵艦、初等學校の児童、阿片吸飲者、ラジオの聴取者、(8頁)  
9 東條さんが廣義義士、東條君の胸に何であつたか？(17頁)  
10 淡色のトイをかひ、水玉模様の白いサロンをまとい、大若い人、(17頁)  
11 何と何でせう？(15頁)  
12 一冊十冊としてあなたは何冊でせうか？

所 込 申	定 價	寫眞週報(兼賣部)
全國各地官報販賣所	一部十鐘(送料一鐘)	昭和十七年九月九日印刷發行
書店、興賣店	(送料共一鐘九角)	編輯者 情報局
新聞販賣店	▲預約配郵希望の方は、一	印刷者 内閣印刷局
寫眞材料店	部十鐘(送料一鐘)の割	發行所 東京市町田町
	合を以て前金を請へ、御申	
	込下さい。	
	▲特大版の場合は其の程度	
	御拂込金より差額を申受	
	けます。	

支那週報

# 建國十周年

## 興亞の據卓大満洲



奉天城内にある  
影繪芝居

### 南満洲鐵道株式會社

内閣印刷局印刷發行

（列強報章）A4倍紙定価は23人の資本